「新しい時代に向かって」

ヨハネによる福音書２０章１６－１８節

森島 牧人 牧師

主イエスの復活の最初の証人となったマグダラのマリアと復活の主イエスの出会いの場面はしばしば絵画のモチーフになって来ましたが、この部分を記した聖書の中に私たちの心に突き刺さる言葉があります。それは自分の名前を呼ばれて主イエスであると気づき、「ラボニ・先生」と言ってすがりつこうとしたマリアに対して主イエスが言われた、「わたしにすがりつくのはよしなさい。」（ヨハネ２０：１７）という言葉です。「私に触れるな」というこの言葉はラテン語では「ノリ・メ・タンゲレ」と言います。主イエスを再び失うことのないようにと必死のマリアに向かって発せられた、主イエスの言葉。共にいて欲しいという願いは突き放されてしまったのでしょうか。

そうではありません。これは、＜今までのように私と生活を共にするあり方でなくても大丈夫だよ。私はいつも一緒にいるのだから＞と言われたということ、つまり復活の主イエスに出会うということは、今この時も＜主は共におられる＞という経験に他ならないということを、言われたと思われるのです。

人生に於いて、私たちはそれまで握りしめていたものを手放すという＜小さな死＞を日々経験していると言えます。それはいつか必ず迎える＜大きな死＞のリハーサルと言えるかも知れません。この小さな死の体験がたとえ隘路を思わせる不安なものであっても、いま大切に握りしめていたものを手放すことによってその人にもたらされる勇気は、これから信仰生活を生き生きと生きていこうとする時の私たちにとって、大切なものとなります。自分の絶望や不安、今までの経験を打ち破られた者だけが、これから未知の世界へと踏み出していくことが出来るのです。つまり、復活の主イエスに出会った者のみが、呼びかけられた者として、今、この時代に必要な言葉を携えていくからです。その意味で、兄弟たちに主の復活を告げたマグダラのマリアは、主の復活の証人として最初の使徒となりました。このように復活の主イエスに出会った一人一人は、自分の命を用いて、新しい主の日を生きようとするのです。

さて今年、私たち金沢文庫キリスト教会は創立４９周年の「イースター」を迎えました。そして来年は「ヨベルの年」となります。「ヨベルの年」とは聖書の教え（旧約レビ記）に基づくもので、７年ごとに土地を休ませる安息年が７回巡った次の年、つまり第５０年目の年を指します。ヨベルとは「雄羊の角」という意味で、４９年目の第７月の１０日（贖罪の日）に角笛を鳴り響かせてその到来を告げます。「ヨベルの年」の基本理念は現状回復で、①畑の休耕、②売却されていた土地の返還、③奴隷の解放などが行われました。富の偏在が是正され、土地も人も神の所有であることが確認されたのです。

私たちは死を迎えることを知りながら日々歩んでいます。しかし、それは＜死＞が私たちを支配しているということではありません。私たちは復活の主イエスに結ばれているからです。マグダラのマリアにとって、主イエスが十字架にかかって死なれたことは何をもってしても埋めることの出来ない悲しみでしたが、けれども復活された主イエスに呼びかけられた＜今＞、それはただ悲しいことではなく、かけがえのない「大切なこと」になりました。マリアは、その大切なことを周りの人々に伝えるという使命を抱いて生きる者へと、変えられていったのです。それは、新しい自分、本来のマリア自身との出会いでもありました。

復活という言葉には「起き上がらされる」、「立て直す」という意味があります。文字通り私たちは先が見えないような中にありますが、しかし、ここから神が与えてくださる未来に向かって、今、立て直していく。一人一人の人生も、共同体である教会も。その意味で、来年に当たっている「ヨベルの年」は新しいあり方を模索していくために与えられた試練の時であり、再び構築していく機会でもあると思います。

今ここで礼拝をささげている私たち一人一人にも、復活のキリストと出会って新しい命へと召された時がありました。その時、私たちは新しい生き方へと歩み始めたという経験を持ったはずです。つまり、あなたも私たちも＜復活の証人＞なのです。みんな名前を呼ばれて神に召されているからです。復活の証人とされた私たち、その場所で神の使命をもって生きている一人として生かされて参りましょう。

「ヨベルの年」に向かって、新しい時代に向かって、今は天に帰られた方々や十字架のもとに協力してきた信仰の先輩たちを思い起こしながら、この教会をさらに立て直していく時としたいと願います。

（説教要約　羽入田悦子）